

編 集 後 記

外科志望者の減少に危機感を抱いている本誌の読者は多いと思う。先日いくつかの全国紙が、日本外科学会による会員勤務状況調査報告を採り上げていた。外科入局者が年々減ってきていることと、その重要な原因である外科医の過酷な勤務の実態や医療事故・紛争のリスクの高さが報道されていた。勤務時間が非常に長く、当直の回数が多く、当直明けにも通常通りに勤務し手術にも入っていることは、外科医にとっては当たり前のことであるが、このようなことは新聞記者も含め一般国民は、よく知らなかったようである。小児科医や産科医の重労働と医師不足の悪循環が社会にも知られるようになり、何らかの対策がたてられつつあるが、次は外科医の番である。医師、外科医はもっと社会に向けて勤務の実情や意見を述べるべきであるし、日本消化器外科学会もその責務がある。

その激務の外科医から多数の論文が本誌に投稿されてきている。著者らはいづれ原稿を執筆しているのだろうか？ 昼間から論文を書けるような恵まれた環境にいる外科医はさほど多くないであろう。手術や外来・病棟業務のあと心身ともに疲れ果てた夜や、週末のわずかな時間を執筆にあてていると思う。あるいは当直の晩に救急手術や診療の合間を縫って論文を書いている外科医もいるであろう。過酷な勤務にもかかわらず、外科医としてだけでなく研究者としても外科学を究めていこうとするその気概に敬服する。

私自身も論文執筆の時間をひねり出すことに苦勞している。外科医の朝は早い。そこをさらに早く病院に行く。まず病棟をひと回りしたあと、カンファランス、外来、手術が始まるまでの時間を執筆にあてている。電話がほとんどかかってこなくて、誰にも邪魔をされず、仕事のはかどる。私自身はとても気に入っているが、ただし家人からは「トシのせいだ」と言われている。

より多くの会員からの投稿を期待する。

(杉山政則)